

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

丁巳年  
二月

卷之三

○禪家有南北二宗於唐始分畫家亦有南北二宗亦於唐始分其人实非南北也北宗則李思訓父子傳而為宋之趙幹趙伯駒伯驥以至馬遠夏彥之南宗則王摩詰始用渲淡一變鉤斫之法其傳為張璪荆浩閑全郭忠恕董源巨然米氏父子以至元之四大家與始祖之後馬駒雲門也。芥子園畫傳卷之三

○芥子園畫傳

清水生安序  
康熙六年李漁序

卷一 花草淺說

漏畫大則

設色苔竹

2283

卷二 樹法十九式

葉法

二十五式

夾葉及著色

筠藤法

三十二式

諸家枯樹法

諸家葉樹法

三十三式

117

諸家松柏法

諸家柳樹法

五式

蕉桐花竹兼葭法

十式

山法

十四式

卷三 石法十式

諸家牽頭法

坡逕磯田石壁法

十式

流泉瀑布石梁法

十式

諸家牽頭法

坡逕磯田石壁法

十式

流泉瀑布石梁法

十式

水雲法四式

四式

卷四

水雲法  
卷四 點景人物

中號點景人物

極小點景人物十九式

極富畫人物  
七主

點景馬圖

精義元機九式

界畫臺閣法十二式

舟楫法二十一式

一  
署  
月  
清  
之  
武

卷五

摹倣諸家方冊式

莫年倣諸家，空缺云。十一月  
享文名以不貴，三天。十一月

摹倣汝家擗扇式

羣仙譜卷之三

○伊賀ノ御土輩ハ皆松柏服部ノ親族ナリ元松柏氏ハ弔平之新宗  
清ノ裔服部氏ハ平内侍門宗長ノ裔ナリ平家亡後其三伊賀國ニ  
潜居ス源賴朝此天子采地ヲ与テ其氏族繁衍シ世ニ伊賀國  
ヲ領ス永禄中ヨリ 神祖ノ曾仁ラ墓フ古牟春信長御土輩  
擅ニ一國ヲ領スルヲ責ム御土輩伊賀ノ賴朝因免ノ地ナリ何ソ櫻

人三役シト敢テ服セス松江市之丞兄弟三州ニ來リコレラ請ア  
神祖先ツ信長ニ服シ本領ニ處シ時ヲ待ヘシト命令シ玉フ信長コレラ  
聞丘ヲ出メ伊賀ヲ攻ム御軍コソラ防クト雖多タク死ニシテ國  
三難散ス其輩三州ニ到ル者扶助アルテ潛居メ時ヲ待シ今茲漸  
御里靜謐ナレバ難敵ノ若宋ニ歸往ス 大三河志賀郡  
卷之二  
續十年八月  
申旦甲辰年八月  
アカ

稻葉一鉄公信長ノ茶席ニテ掛幅ヲ讀ヒシハ黒  
虚臺ノ詩ナリ諸書退之ノ雪横秦嶺ノ一聯トスルノ誤也ト曰  
候矣ノ系譜ニ所載ラムニス

大元志士注宋儒康  
華墨壁之書重入

卷之四

木葉辭柯霜氣清虎頭載角出禪處

縣來詐此情  
之多或祁り鶴の歌

右馬上虛北

りのとれをとらひ  
ちまねうるよこまき

ぬる  
あわせ  
ねじり

おとみひ。不居つてりやせうことのいわむ  
ハタかよほのまつともあやせんよとしめどむくせ  
○加川主爵公事船宿守に任ひて所中は原泊をれむ行  
あくちもシトナリぬれ、馬士舟泊のとよよのる。

○郡佐 唐州

別駕 庾置不

長史 別駕  
官至隋為郡官唐永徽二年改別駕其後三職並置  
王公長史理府事餘府通判而已  
司馬  
司馬  
高宗即位遂改諸州治中並為司馬  
通謂之上佐  
ウ画用

通守 唐無竹職  
長史同

功曹

兩漢有功曹史主選舉功劳取代皆同唐改曰司功參軍開元初京兆屬官及諸都督府並曰功曹參軍而列郡則曰司功參軍合掌宮園祭祀禮

典字校選舉表疏臣筆傳牒表葬葬之事

錄事參軍

晋置後漢州郡主簿隋初以錄事參軍為郡官陽帝又置主簿唐武德元年復為一開元初改京尹屬官曰司

錄事參軍

在府為曹在州為司

司倉 上書

唐亦掌倉庫毫毛財物厘布之事

司戶

通謂之戶  
唐掌戶口籍帳婚姻田宅雜稅送路之事

司兵

唐掌軍防烽候駁送馬門禁田獵儀仗之事

司法

漢決曹賦事王刑歷代皆有或賦曹墨曹

司士

唐掌律令定罪監賊舶貿之事

五左二掾

參軍事唐改為參軍掌直侍督守無常職有事則出使

○傳  
和國のあすすんこすとそ  
身あやゆる

身すと後くもあ卯のを移すゆきなたゞいも

千経方ゆつ

身のうちのゆうおこしもあらのゆうのゆれ

れゆふ

見ゆる

せとゆえあらわといまとひのゆよ徳うへキ

○枯馨 五 白手 龍脣 五厘 白乃糖 五

右三からシ帛に包み合津便ハ銭下スシ

右咽喉癰腫僻發初期ニ用豫防

木木忠量傳

玫瑰卷 亦用

○ソルダーテンペロンバタイロンリード。等ノスコール 千八百四八年改定ノトヤウ

一デッケルのタクチーキ

足立至多

一カレニールスマール

附書より

一ケレイグスキンド

此言無事トミ義由前後ニ何次アシント

一ミルタイシウルテサグブヲワク

無窮可書

又ミルタイシサツクオツクトミリ別種ナリ元タイサツキツクハアリスルモア

○大三志

天正十九年三月

卷十七

ナリ神社市川ニ到玉フ庵下ノ士成懶正先年浪店ノ才武田信玄ニ接り甲  
州武川ノ諸士ト睦シ 神社是ニ命シ武川ノ士ヲ喻シ降サシムニ武川ニ到ル諸  
士皆逃亡テ不モ處アス 此日此時甲信ノ望  
因逆を放逐ス 依テ西一高官 元は諸士市川  
ノ脚臺ニ到リ幕下ニ屬ス甲子ノ書も帰ル 神社重義止迄蒙テヨリ仰慕  
ニ辰光れ武川ノ士長折井市右衛門次男半右衛門主計忠健等大ニ悦ヒ是夕夜ニ  
及テ兩市市川ノ脚臺ニ奉り拜謁シ奉リ武川帰リ泉吉ヲ喰シ參人萬  
春ノ降服ス此時信長令ラドン甲州ノ浪士ヲ召スルヲおもんヨリ暫時  
遠州相出ニ賜居スキノヤドク今リ半倉折井兩市ニ接テ降ル諸士御役

兵部丞信俊伊賀陣三吉門曲側庄左衛門吉景と根拠作曾姓氏即正

宣政折井九郎次郎即馬賜同長次郎曾雖新滅有宗忠誠山高古少輔

信方青木と參術同清左馬鷹左門丞多田孫三郎芳平是武完

ト行方

又卷之十書元信俊主ノ歎九郎

又廿九日役御宿本ニテ終

○御臺固考十卷 江永著

考工記固二卷 戴震著

考工記車制固解 阮元著

皇清經解卷三

積古齊鐘昇彝器考 呂上

リ上

○六月信長水野信元三合メ尾崎ヲ襲フ。神祖兵ヲ生メ信元ト不敵  
ニ出テ迎戦フ時ニ信元ノ兵中ニ金ノ鯉ノ兜ヲ被タル者アリ矢因作十郎是  
ヲ意テ使ツヒテ其兜ヲ我ニ與フヨト請フ其士卒ハナルハ我好ミテ此兜ヲ  
作ル汝所望ノ事基本懷タリ此兜ニ懸フ付サル者ナラハドトニ矢因大ニ  
歡ヒ此シ付ル意ナラハ何ア汝ニ請フキトテ兜ヲ請ヒ受奮戰ス大義忘恩五  
矢因作十郎ニ去年金ノ鯉ノ兜ヲ敵兵ヨリ落致テ後毎度ウレ顕シケレバ世人皆矢  
因ノ鯉ノ兜ト称譽シケリ時ニ此役ニ及ブ蜂屋匂坂叛物ニ其兜ヲヒ大四三毛フ矢因  
カ曰汝此兜ヲモア宣ニ我心ニ同カルジ然レヒ我敵乞得シ時敵ノ舞ニ此兜ニ庇  
シタクガタヌレ也塞々ニ此庇トミルハ後シテ取リ行名ヲ残スナトノナルツ因テ  
今日ニ至ルコト一度モ汚名ヲ蒙ス汝ミ又此意ナラハ貽ルニヨリ自其意無ノ所  
仰望ムキヤゆ益ニ意ヲ卑セリ我亦歎シテ思フ故ナリト大ニ悦ヒ其兜ヲ請多ケテ此陣  
ニ出ケルガ石川数正ニ先登セラレシハ敵兵大嘲り笑フ貞久是ヲ耻テ此後誓  
テ先登セニシ石川一秀鍾ニ非シハニ為ニ槍ヲ合スニシト心ニ励ム甲福元年二月  
模倣村原慶子信元ト號是ヨリ先石川數正蜂屋匂坂矢因作十郎此後誓テ二槍ニ下ル可  
テスト言ヒガ是ロ本多忠勝先登シシトニテ槍ヲ入ルコト忙急ヲ擲キ刀ヲ最  
牧野ノ吉田保主牧野宣成槍脇ノ敵えヲ殺シ又河合正徳ニ當ト正徳前二年七月立候年男爵也才  
人多生喜ノ事也ト仰せヨリア唐十郎元引砲術熟モケレハ身後ヲ、カレト大砲ヲ持メ待テ身後忍レシス直ニ奮進ニ左手  
ニテ大砲ヲ向キテ握リ片手三三正徳ヲ斬ル程テ膝ニ正徳面口ヲ引カシ砲ヲ發ヒ  
次カ肩向ニ中ツ立以休シ敵駆來テ甚者ヲ放テトス忠勝是ヲ追退ル三度其隙ニ  
左以右後土来テウヘア助陣中火是七年五月十三日正徳五ア火

死スオウノ行士曰比野無事戰争メ勇力也シモ先母曰士ト大々戰場ニ命ヲ委ケラ常  
トス我子後辟ノ勵ノ君カアニキソノ落ス何ツ悔ニ及シ若シ怪弱ニテ弱リテ後世ニ遺サ  
ハ我子有命也トモ枕死スルカ如ナラシトニ落臣大ニ其義ア威

ハ我子存命也トモ枕死スルカ如ナニトニ清陞大ニ其義歟

○此後國歸城下矢引川濱水三矢引橋流失ス 神社遷移ヲ駕シト令セ元  
先臣相議ノ由矢引橋並キ大橋ニシテ修造ノ資用甚多也且我國之城下矢  
河凡ノ中一ノ要害也今テ移ア流矢ノ章也以後其能渡ニナス 之トニシテ猶當  
古考ヨリ記述於雅羅ニモ多タク之傳ヘ于其名海内ニ有之費多キラ歎ニ極ム  
止メ船渡ニセキ往還ノ旅人國內農商雖或セシフ國ノ以本毫ニ取ス假  
今何程金錢費ユル凡早ク修造モ通路ヲ妨シ可ラク要害ノ險阻ヲ除シテ  
人ニ依リ時ニ依ル可シ人心一致セシ何ヲ要害ヲ用シ要害ノ強弱ノ全海  
寧古罕ニ有ツシトニ諸臣理ニ服シ橋修造速ニ成就ス 甲子年正月五日

大義志第二十二 長久手變序第十九  
山田志賀左門 正勝

義重ノ氏族ヲ乞ラ嗣トセシトス家臣聽スア伯憤テ天徳寺ヲナリ洛陽里右ニ  
陪居キ秀吉ア了伯ソ物テ東洋ノ御城トス承二了伯リメ佐野家ノ長臣等ニ計  
シム家臣等皆得大恩越中ニ移入フ守ルテ自殺ス了伯忌ニ富田左近將監知信  
ノ弟ニ子ヲ請テ家ヲ嗣ニメ佐野俊理左夫改宗ト称 大元高志左夫  
天正十九年山田昌輝  
○其後登陸了伯  
天正十九年三月得罪父子配流信州松平  
時辛巳、う破却ス  
十九年三月  
○常州山田讚岐守入道天庵  
カ子彦次郎守治モ本領フ離レ浪士ナル守治ノ妹  
結城秀康君ノ愛妻ナレハ後年越前赴ク

○未央宮東閣尾硯銘  
茅茨咸息土木侵興互委職曠分輸伎騰阿方隨燼未決鼈零  
其基址荒蕪甄陶遺精貞堅害朽墮頭相承龍壁結姦端石  
避清者靡致殆朴苔流聲點厥徐謀鑿陰金之功懲  
疑漫 疑公 疑朽 繼

素  
當製  
大漢  
當供

行道言

素  
當製  
大漢  
當供

捨物去之有  
得失莫賜  
神翁捨去是向  
明極已同捨約勿以相競

○ナニ母子台徳廟武州稻毛ニ效宿をし給ひ 御病ニ宿モ己稻毛ノ別墅ニ  
於テ是處に度月を以て侍フ 大三川也毛ニキニ 康長三年十二月

○アヅミトミヨトニテモトハニカム又ビル五圓玉シゴム又ハガム  
モトモヤニル闇所にてワニル也給矣テスム クレモ系ばれ

モアズヒラハクシ トシヒトモシヒタ高

物類詠呼

エヌ新拟用幕の御ヨコスムトモ御ヒメツメル 鈴錠十四枚下ラバ  
ケスコス様ニゲスヒリニアテカヒテトモ御モロ古ミシヘニヌ  
マヌ枯ミトミヨマタケス近リハ熟ミのムキヨアテカサトハ御司  
シ所殊ヤ一ちじる改ニ下ヌナリ見ヒ賊ニアテガハズトウ

○美濃毒木ノ領主毒木致坐助モ ゆ但ニ属ス小家ト雖兵ヲ出し近

村ニ放火メ來リ攻ム

官有ノ田を侵行ヒ或ヒ名ト呼被

大原志士四半六國共

○又至平木下前妻木猪樂即今之美濃ニテ蟲食ニ及ヒ死ミノ

協行本叶

○又モノ大林

アヌリニモ載ス

又五十卷ノ十八枚

モ載ス

因本直改テナシノ書

○公事武者 残陣在ル竹ノ士ノ姓名ヲ同フニ以鳥合チノ國役ニ出ル十ニ星ヲ 番事  
武者 武者トテノ閑聲ヲ聞ハ往復モトセリ 大原志士四半六國共  
○九テ上杉家ノ謙信以東陣也ニテ旗ヲ用ヒス時一组一隊ノ廻職ニ三本ハ用ヒ  
其如ニ後フ皆脇革ニテ前サシナリ火砲ハ大抵種子島ヲ用鐘塔勝也 尾三  
十二丁又表尾勝也上出津ノ年

○鳥居忠端子新正所忠政ノ遺誠ヲ送ル其詩曰

ニニと方陣押テ凶徒麻モ少無謀モ石田五好孫ニ瑞モ先づ義母ヒ  
ハ多子とどり立軍細拂つまも其生ミトアホシヒササヒ母と跋(重  
計)也モシ是也と大抵多御未アル高モ子也アヤセ千手也用也モ一方  
と付けて召んよりうれ慶也モアタキアキモルヒテ力高ヒトニテ難  
も多モアトモの物也と日よりもヒテモ野羅也人取ヒ功烈也因是子也  
付給モシ承ノ御家風也も多モの地也と仰給也功烈也退不帝と情モ難  
弱ヒトアキモルヒト御昌ノ宗も先祖也天下の才子也と進ムモ也  
有トヒト有モ也さく方を列モすアヒトアキモ也

主事のゐる所と改めて書字の所は、筆を止めた。まことに筆の運びが  
少しくつまらぬ所がある。左の所は、いわゆる久松代と申すが、  
とちひてあくまで伊勢守居は、江戸の御子と申す其居、處をもとへ出立と  
仰せん。又原をかねて御用事まで付けてからと申す。　上様即ち左  
院の事務を手にさしむれりあはば、伊勢守居は、御使をうな  
上様十九歳即ち年四十歳ばかりの頃と見て、そこには必ず其の年号  
名を冠して「上野守」とある。又其の年号は、景和元年と云ふ。　上様  
生誕十日間の序付始め即ち出生する所は皆在紫家而御室より遣  
せられたる所と今度宮東即ち近畿の付城の奥心を被るやうにされ、御室をと  
り金井の大切に上ある御之代と申す御室と御内代と申す御室と御  
外代の三色の下に生れたりて、眉間にあく年と改め、下の面と改め、  
角を年と申す。手代と申す御室には、又名あおと申す久松と改め、幼少の時  
を御室と申す。手代と申す御室と改め、幼少の時

まふれを左ゆあきと爲る列席と云ふと用て御三事  
官とはあれども冻とて行房へ天下の敵に立て上様  
よりすよ下り左角にて仰面にて坐すとあてちゑもすんと  
見て仰ま公す。おしとせんぬくとおあてと武志と名利と  
をも説じと知りてお孫と賜らんお名はめんと教えられて食人全  
命と情うゆきとみゆくや命の情やれては月と我心とおもひを武志  
おも生れゆく者とお掛けもはなとと翁と思ふとが、猶の内に奸  
淫と工むゑと掠犯と敵をも構え未だ武志と何を謀る傍若無  
心と是車とゆすやな、おれ先づておとこをうなぎりとし  
おれもゆく焉や候とおとこをうなぎりとおとこをうなぎりとし  
されうちお一門跡と考へ社家を爲玉屋能前下に情取とかへ  
寅冠の種を承りて報徳仕官歴官にて人をもとすと  
かくとく書記と濱鳴平大年と命の授大三所志卷四一 慶長五年七月

○閑原ノ役ニ稻葉侯ノ郡上ノ苗守稻葉土佐ノ後ハ稻葉馬左衛門トニ  
二万五十石ノ家ナリトワ日下義之丞ノ角

○黒田甲斐又サマ鳥取ル小鷹の石田治次ハウラノ鳥

閑原と物しサア  
印成於ニシテフ

○列衣織サツナカ 少郎木重勝居城物草山ヲ細川忠興重用シタリ大政ヨリ逃亡賤卑ノ衣服装備ト言フ

善し縫きと萬々色と着テ忠興ナニ中ノ近キ窮屈夫

大三所志卷四一

○業志冲治上州足利学校三要長老ニ命ヒ貞親政要孔子家書武經書  
ヲ板刻ヒ治天而卒、年七十不惑三十時冒雨水波家ヨリ得テ然東謹尚

ク板刻ノ命レ信フリトモナ

○大給松平家兼福室和室、廉親リ而謙著ノ詔文ノ底上三室大修ヲ都  
福ノ角ニ体テ家ノ輕重ヲ以テ上下ヲ五万石以下タリ凡歲者ノ頃即ち印ノ時席

次シ宝大修ヲ毛矢年 慶長三年 四月也

○是ヨリサキ垂美伴天連三人耶楊子トアヌル者アリテ耶蘿ノ邪  
道宗門ヲ禦ルニ非ス國家ヲ傾ケヘキ為ナリト禹西ニ訴ルニヨリ

吉利支丹制林エノ嚴令ヲ發シ給ヒ日頃彼耶楊子ヲ厚  
ク賣セラシ西ノ丸下ニ居宅ヲ賜ル彼ノ耶種宗門或ニ吉支利丹  
ト移故有テ今テ切支丹ト名フ其始ハ大明隆慶萬曆比南華利  
瑪實ト云者中華ニ渡リ浙江府ノ郊地ニ一宇ヲ造リ學問ヲナレ華語  
ヲ漢語ニ訳シ天主宣義崎人十編友論著ノ書ヲ撰ミ其通フ說キ  
邑民ヲ通ス年ヲ歷テ邪道ヲ信スル者多シ麻迪我ト云唐寧人  
是ラキ其後數十人ヲ卒ヒテ渡海シ利瑪實ニ屬シ七免書ト云書  
ヲ作り貪民三金銀ヲドヘ悦ハシム其勸メ應スル者多シ  
天文海鎮西ノ探照大友義鏡入道宗麟カ城下坐後石内山富院地  
アレハ西洋諸島ノ商舶入津シ交易ノ利潤ヲ奪ニス其ノ中に天連ニ不  
來テ耶羅ノ邪法ヲ勸メ金銀ヲ多シ施ス加爾安ノ者多シ猶御三事宮門  
畿内中四ニ及ブ天文初儀田ノ博庫ノ國立言木村重ト戰テ屢利ヲ失フ信  
長ヨリ忍ミ村重ノ長臣高櫻ノ城主高山右近友詳彼宗門タルニヨリ仁

長伴天連ソ遣ハシ利害ヲ説セ五詳遂ニ信長ニ屬ス是ニ於テ村重タニ  
威袁フ信州奥ノ域工ニ幸候ラタケ伴天連ア信太邪法日ニ度ニモ吉一統  
後世上大ニ興弘シ大三所志卷之七 慶長十八年 後高山アマノハニ故ニシテ生ヒシテ 利鏡既傳御三事宮門  
○羽折カルサシ 十日已刻神祖途中放鷹ト有テ相折カルサシラ第サセラ 宿禪ニ  
殿存ヲ登シモア 卷七十 度長十九年十月大坂陣

○開原御陣

大三所志

- 卷之十四 度長三年四月小十二月止
- 三十六 四年二月
- 三十八 五七年六月小十二月止
- 四十 五八年六月小十二月止
- 四十二 七月十九日小廿五日止
- 四十四 七月廿六日小晦日止
- 四十六 八月六日小十二日止
- 四十八 八月廿日正則涉尾越 廿三日吉隆到正日
- 三十七 五九年三月小六月止
- 三十九 度長五年庚子正月ヨリ六月廿日止
- 四十一 七月十四日小六日止
- 四十三 七月廿五日廿六日
- 四十五 八月朔日小四日止
- 四十七 八月十三日小廿日止
- 四十九 八月廿四日 廿五日 廉廣宗國晴

卷五十九

口九月朔日 神祀登江戶

卷六十

口九月七日

神祀到中泉

十三日

青不一矩福貨子

五十一

口九月三十日

火水攻立石砦

卷六十一

口九月十四日

長重屬神祀

兼信及長右季休

五十二

口九月十五日

秀忠移攻吉澤

卷六十二

口九月十六日

神祀到中泉

三成連山於義弘

五十三

口九月十七日

秀忠移攻吉澤

卷六十三

口九月十八日

神祀到中泉

三成連山於義弘

五十四

口九月十九日

秀忠移攻吉澤

卷六十四

口九月二十日

神祀到中泉

三成連山於義弘

五十五

口九月廿一日

秀忠移攻吉澤

卷六十五

口九月廿二日

神祀到中泉

三成連山於義弘

五十六

口九月廿三日

秀忠移攻吉澤

卷六十六

口九月廿四日

神祀到中泉

三成連山於義弘

五十七

口九月廿五日

秀忠移攻吉澤

卷六十七

口九月廿六日

神祀到中泉

三成連山於義弘

五十八

口九月廿七日

秀忠移攻吉澤

卷六十八

口九月廿八日

神祀到中泉

三成連山於義弘

五十九

口九月廿九日

秀忠移攻吉澤

卷六十九

口九月三十日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十

口十月一日

秀忠移攻吉澤

卷七十

口十月二日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十一

口十月三日

秀忠移攻吉澤

卷七十一

口十月四日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十二

口十月五日

秀忠移攻吉澤

卷七十二

口十月六日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十三

口十月七日

秀忠移攻吉澤

卷七十三

口十月八日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十四

口十月九日

秀忠移攻吉澤

卷七十四

口十月十日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十五

口十月十一日

秀忠移攻吉澤

卷七十五

口十月十二日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十六

口十月十三日

秀忠移攻吉澤

卷七十六

口十月十四日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十七

口十月十五日

秀忠移攻吉澤

卷七十七

口十月十六日

神祀到中泉

三成連山於義弘

六十八

口十月十七日

秀忠移攻吉澤

卷七十八

口十月十八日

神祀到中泉

三成連山於義弘

## 大阪陣陣

卷六十九

慶長十七年閏十月

十九年二月

卷七十

慶長十九年三月

大佛供奉鐘磬

口元未終方御元

七十一

口十月廿一日

秀忠移攻吉澤

卷七十一

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

口七年正月

七十二

口十月廿二日

秀忠移攻吉澤

卷七十二

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

七十三

口十月廿三日

秀忠移攻吉澤

卷七十三

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

七十四

口十月廿四日

秀忠移攻吉澤

卷七十四

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

七十五

口十月廿五日

秀忠移攻吉澤

卷七十五

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

七十六

口十月廿六日

秀忠移攻吉澤

卷七十六

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

七十七

口十月廿七日

秀忠移攻吉澤

卷七十七

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

七十八

口十月廿八日

秀忠移攻吉澤

卷七十八

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

七十九

口十月廿九日

秀忠移攻吉澤

卷七十九

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

八十

口十月三十日

秀忠移攻吉澤

卷八十

慶長六年正月

諸將ノ功臣對

八十一

口十月卅一日

秀忠移攻吉澤

卷八十一

慶長六年正月

○劉德公登陣ニ依テ驛路ノ制ヲ益々踏次驛舍ノ木錢具舍ノ主薪ヲ  
焚火一人ニ銕錢三文馬一疋ニテム又其人自ラ薪<sup>置ヒ</sup>標火ノ宿舎ニ及父駄使  
ノ馬ノ駅ノ次キ場ヨリ先ニ追ニ通ス<sup>カク</sup>又駄使銀ノ定制如ノ大司馬<sup>太常司</sup>七十二  
○息壤空土也<sup>ノ</sup>縣窮亭ニ息壤以煙鴻水羅<sup>火</sup>踏史云息生之土長而不窮  
漢時臨滌地涌六里又無鹽危山土起唐江陵南門地隆起如伏牛馬去之而  
後又柳子所言永州龍興寺化如負甕起皆為息壤<sup>並子隱全之謂也</sup>  
起也顧遂圖曰王莽故公廳事有土墳起古息壤也<sup>通政十七北興</sup>

○通經言西書<sup>足</sup>天文中九天<sup>詳雲漢</sup>距度星多<sup>節</sup> <sup>10</sup>四極四荒

○天步真原

周易解

測量新義詳見一一一

天文十

○晉書天文志

天經

古言天者三字家曰蓋天曰宣夜曰渾天漢靈帝時蔡邕

于荊方上書言宣夜之字絕無師承周髀術數具存考驗天狀多所違失惟謂

天近得其情今史官候星所用猶幾則其然也

蓋天

周髀即蓋天之說也天員謂<sup>天地</sup>如基局天旁轉如推磨而左行日月右行而天右行

王仲任據

蓋天之說以駁渾儀

其本意據氏立周天度其所以別則周公受於殷周人志之以

曰周髀之股也股者表也

周髀數五天邪

虞喜作宣天論

虞喜作宣天論

姚信作

周髀數五天邪

</div

春秋元命苞曰地所以左轉者氣陽精少含陰而起遲故轉左迎天佐其道同是移地邪

又曰天左旋地右動

足

尚書考靈曜曰地有四遊處至地上北而西三萬里夏至地下南而東三萬里春秋分則中矣又曰又曰二十八宿之外東西各有五千里星宿四游之極謂之四表據四表之内並星宿內總有三十八万七千里之徑天中央正半之處則一十九万三千九万里地在于中厚三万里奉之時地在正當中自此漸之而下至夏至之時地下方五千里地上時天中正夏至之後地漸之而上至秋分地正當天之中央自此地漸之而上至至至上万五千里地下四時時天中平自外至後地漸之而下地常升降于三万里之中又曰

河圖云地恆動不止譬如人在大舟上閉牖而坐舟行而人不覺又曰

○屏风有星扇可開闔曰連屏

李詩有六扇屏風唐記白畫屏

鳳十二牒

廣雅星向

櫳扇直羅屏風

通羅扇用

○年代畧十九卷一名日本紀

汝陽武上皇傳正天海以

神祀請八事之類

聚三代格六卷

宋書玉雲

櫳扇直羅屏風

通羅扇用

○將門純及淳及事蹟扶桑黑祀之載不滿祀乎細君ナリ

御書言上

○唐玄位度日月食分告省時列分杪可謂蒸矣

西法空缺年余閏月而差一辰

蓋日躔者日之

又占命歲無歲差一小三五秒行七積三十九万零九日之四万九千而日合是乃一月也

北極星氏曰中曆不及西土者凡有數種

一曰經星度差

有說

一曰月將之差

一曰節

中華正朔割圓而西分正弦餘弦切線割線等八法正切餘切正割餘割等條

○距度言赤道より黄道相距也。舊法赤道至黄道二十四度西法卷定二十三度今更  
改て得二平三度不差改千年而一至正方也太陽之行之有方有低差改千年而  
五世近又附地遠也

○立泉相國院南山城縣水善子天神韓愈縣深圭天神正部侍臣天神皆稱瀑布餘波流經桂天神浙江支號  
瀑布也從地東稱地

○駘衍大九州縣臆耳修焉雅秀水華藏固如鑿然表心量耳今  
資太西之說則以訖周髀歸于河洛則不主此一途矣乃悟聖人之差  
別有本易簡也。直從地東九州建郡者累四拉回言尤當以地脉五大分之

戊年

○痧脹玉衡居五冊

清撫李郭點選石陶著

康熙廿四年乙卯自叙

日本宣德元年辛酉翻刻医官小史元璞昌嶺甫序

享保廿一年丁卯新撰 康熙書

一序目

二卷上 王衡要語三九條玉衡居肺法八條 佃述癸蒙論不尽七條

三卷中 諸症 治驗 三十二症

四卷下 諸症 治驗 十三症 王衡備用要方 五十八方 彙集性便覽 二妙方餘談

五總論卷五十一論并五十二條

○甲陽軍艦二十卷

万曆二年己亥刻

高枝澤正記  
天正五年戊寅澤正之後春日惣右衛門書

一件長尾輝角號牛頭號の如きと稱して名を云ふがとて何れか不<sup>レ</sup>れ、  
輝角の如き又云ふて之が號牛頭の如きと云ふもの如と少保氏  
藤武四住吉の如きと云ふて之をとて之の一樣よしとすりよひ

タチヤと云ふ舞角あやと云ふ舞角はカクルを以て不思ひの会計  
ツナリ舞角は舞角も云ひが管の尾ふと云ふと止得可タリも六万年  
ねうえどもそりと國中ニ事代と云ふ事あり人死れと有玉成事  
トモ多モ教み仰りて云ふ事あり

モトロ舞角は舞角私國本朝アハタマトヨリシトス  
セキサモトヨリシトス

又舞角の儀用後半より半月上松葉節又云舞角子はもとハ儀用  
左半後半モトリ信玄公代昇天リテ候あもねと云ふのどのがみ  
中半信玄公半身の半身の足元下され武将のつまもす協教ハ舞角  
トリテ扶侍モト本と云ふ事には一比信也と云フ扇のあは化シテ  
一ミナリ全ノ所ニモテきよアガヌの陣ニテ福島の御向のみ

卷六

金崎走賀酒造郎の退告皆信兵ノ不業セ

消夏錄五十六

○賣花 里語婦女侍門 淮鎮新六左原名  
為高麗花 批今ノ辻君シ

○尚官 咲味子力

○妻童 ワカミエ

○龍湯樂子

共同上

○除夕舞 諸常呼彈唱家辭歲

歌舞者姓衛一

○六 家聲人

義豈支浦

○看廿壯 直城中ノハリシ

○齊大方一 佐益語謂屋上暉望以故防盜看廿壯

四上

義豈支浦

○詩法 大抵の術多手法捷巧

口七 各別體

口七 俗別體

○幽會 僮婢夜半一に斯

口七 俗別體

卷之四

伊洛學文主

伊勢流傳書也。蓋是行將代右筆，記錄也。

仁學  
引傳

卷之三

一  
書局文の書札にはさみの筆へ旨よりと書ひやまの宿也  
多々トと書ひやまのもじゆや、方とソリありて書ひやまの書  
もりの事也又文也上をう事ニ枚と尾一一枚とおもて用ひ、裏  
也いぬりうと正をちくと二のゆひぐ、又文也上をれうよ  
月りともちひき書ひて、主底の上下と印ねまともし又文の毛三ひわ  
てもあおもじゆ可書ひおもれ傳ひ、びん名をあくよ  
字がまの字もまが書ひて、萬字をえうるすかとすせも書也又女  
席のアレ、うわもしりまめ、ほりもじゆ、席の名と達どものと書ひ  
りてあすりことあもて、書ひて、かのじよて、かのじよて、かのじよて  
ともぐく、男の内とまて

三

卷之三

四  
六

アーチモード  
ちやく

廿二  
いつきのゆうか  
令ア  
名のう

子也者也

次也と云ふ事

五  
十

右の如きを書てお

章より見えたり書れし御者  
も見えたり今見え

卷之三

土をうるおと用ひと文  
墨と歩くと二面のよし婆文

也。第一、二枚男の一枚也。

卷之二

りことひちゆくあと三時よ甲へありてれりありせりとひまをあはふれりありかせり  
ともえをうへてがむきよもせなみすはゆのゆりこりこりとよしやうややかんよが  
てありわざれぢりヒヨウもあひよりあと書也男のめよぢとスル所也と書也御も  
か房ゑひき數字可書とおゆつ我と印様ほんなりとせりうやまじて書也三枚  
事あづかわく一ノ毛と被す場所よりまづあくわためめを取れども

前よりきずつ又事ハアリありケンタクオードビ  
ス庵よ成す事はきあらか子をばなら  
りもそせん庵まろきあくふねどもあく書めれアヌモドキ  
石先セ姫子ありゆもち壁ノトミ御子を也秋の夕又  
うき、心事アリタキセカイの叶らキモトヨハラシモセ

著者　一　年　南石門記

謁次

予後於江陰、先人充一、即之又多矣。望丈  
莘先生序

一 腹後ノ銅板大刀ト三者アリ其祖國至ノ武者ノノ傳家刀長クシテ邪テア  
トテ石柱ニ鋒ヲ抜ニテ二尋折メリ且作用ヒテ子孫ニはへり今テ大刀父祖ニテ  
刀ノホウシナリニモビヒトキ付テ五ウシツコシラヘキリト大矣ニ

三脇公ノ叔元ノ刀 信長作 二尺一寸八分  
肥後西山大衛ト云人アリ 義昭將軍ノ血統ナリ  
中年千歳ナリ 美昭將軍ヲハ  
細川家三ノ母也コレアリ後ニ脚子アルラクロ出サシタルトニ代々莫御賓テアリレ  
父也ヨリ役ヲモ勤ルトナリ

○諸天

英國侯失勒京平

英國憲兵亞力譯 海寧李善蘭附述

和列未下 大日本福田泉訓云

字月子系

凡例次前福田泉曰因而又有所謂中英尺度比較之例示我 皇人主比列等丈  
所載之尺度者為我 皇邦之尺度則清天者乘一個。一七英尺者乘一個。  
○土七得者 皇尺也乃清之尺者 皇之尺一尺。一七厘尺英尺一尺也 皇之  
尺六厘尺也又清里者乘一個。一四二五英里者乘一個四八四五得  
共 皇里乃清一萬里當 皇千四万十二里半英一萬里當 皇四千八千里  
半餘步準此

○延喜式

和禮

四時祭上

神祇二 四時祭下

伊勢太神宮

大神宮

主神

中野諸

主神

內記

監物

典鑑

主神

○延喜式

和禮

四時祭

齊宮寮

歲祚

太嘗祭

神名帳上

神名帳下

祝詞

主神

○延喜式

和禮

四時祭

齊宮寮

歲祚

太嘗祭

神名帳上

神名帳下

祝詞

主神

○延喜式

廿一

治部省  
玄蕃寮

雜樂寮  
諸陵寮

廿三

民部省下  
主計一  
主稅一

下  
正觀司  
正觀司

廿二

紙幣省上  
主計寮上  
主稅寮上

准以狗  
鐵部司

廿五

無部省  
大藏省

主藏司  
主藏司

廿六

主計寮上  
主稅寮上  
主藏司

准以狗  
鐵部司

廿七

主計一  
主稅一

下  
正觀司  
正觀司

廿八

主計寮上  
主稅寮上  
主藏司

准以狗  
鐵部司

廿九

形部省  
大膳府

判事  
囚獄司

三十

主計寮上  
主稅寮上  
主藏司

准以狗  
鐵部司

卅一

大膳職下  
大膳府

主藏司  
主稅司

卅二

主計寮上  
主稅寮上  
主藏司

准以狗  
鐵部司

卅三

大膳職上  
大膳府

主藏司  
主稅司

卅四

主計寮上  
主稅寮上  
主藏司

准以狗  
鐵部司

卅五

德樂一  
正觀司

納膳司

卅六

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

卅七

火燒寮  
正觀司

主藏司  
主稅司

卅八

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

卅九

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

四十

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

卅一

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

卅二

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

卅三

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

卅四

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

卅五

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

卅六

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

卅七

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

卅八

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

卅九

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

四十

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

四十

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

四十一

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

四十二

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

四十三

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

四十四

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

四十五

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

四十六

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

四十七

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

四十八

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

四十九

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

五十

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

五十一

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

五十二

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

五十三

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

五十四

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

五十五

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

五十六

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

五十七

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

五十八

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

五十九

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

六十

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

六十一

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

六十二

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

六十三

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

六十四

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

六十五

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

六十六

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

六十七

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

六十八

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

六十九

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

七十

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

七十一

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

七十二

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

七十三

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

七十四

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

七十五

主藏司  
主稅司

准以狗  
鐵部司

七十六

彈正署  
正觀司

主藏司  
主稅司

高麗魂神

忍坂

長谷

都禊

養布

竹谿

刃

四十九

潔衣

鮓

四十九

神部

祝詞

柏手

五十

伯

神祇

五十九

鳴雷神

六十

糯米

六十一

鮓

六十二

片盤

六十三

鮓

食薦

肇籠

七

壞

七

曝布

七

平魚

七

窪坏

椀形

匏

壞

七

食薦

七

雜盛

七

黑葛

軋

彈琴

七

織帛

七

表裙

七

平魚

女孺

大宮賣神

七

交易

七

和布

七

雜盛

七

泉

箕

七

清酒

七

濁酒

七

都婆波迦短

七

如杯

羽翼

七

狹井社

七

貲布

七

今木神

七

古開神

怒

七

和氏

七

座摩巫

七

霹靂神

七

相盛

八龍

七

ト庭神

七

陶榦

七

小斧

七

刻柄

刀子

七

陶磚

七

瓦

七

御殿

七

忌火

庭火祭

三

座摩

三

御門

三

生嶋

三

金裝橫刀

一言

七

烏裝橫刀

一言

七

御贍

三

文部

御麻

熟一

七

荒世

熟一

七

和世

熟一

七

和服

一者賜

七

碗

七

水盆

七

七

水盆

和服

宮主一者賜

七

碗

七

水盆

七

七

水盆

伊勢大神宮神嘗祭

幣帛ヒナカツカラ

從者ミカエノイハナル

御巫奉齋ミカエノイハナル

神祭ウ

座摩巫

相太詔戸シヤクタシロ

太神社

鴨別雷社

鴨御祖社

宇奈足社

穴師社

巻高社

多社

巫部

神部

巫部モトニテラ

下衣

表裙

腰褶

襍

髻髮

襪モトユヒ

○絶

○絶

○絶

○絶

○絶

○絶

○絶

○絶

○絶

臨時祭ノ中觸織ミタツキシテ詳載

五十金河上

天照太神

相殿神

物忌モノイカ

荒祭宮

神衣

月讀宮

月夜見命

荒魂命

伊難宮

度會宮

豐受太神

朝熊社

園相社

田乃家社

牧野社

大土御祖社

朽羅社

大國玉比賣社

神前社

坂手國生社

狹田國生社

大間オカマ國生社

大間オカマ國生社

大間オカマ國生社

大間オカマ國生社

大間オカマ國生社

大間オカマ國生社

大間オカマ國生社

大間オカマ國生社

栗皇子社

捺原社

坂手國生社

狹田國生社

大間オカマ國生社

度會國御神社

坂手國生社

狹田國生社

大間オカマ國生社

○詩水雨占白鷺

栗里王故

蘇東坡

林逋

大國生大德

蔡襄

妙隱林

大士師

林逋

大國生大德

蔡襄

頤會會

豐受方軒

林逋

大國生大德

蔡襄

○詩水雨占白鷺

社立寄董卿嘉榮 居然雙捕虜 用後漢馬武再為捕虜將軍事也

○五傳建白

明治八年乙亥一見

京師西京相國子

大藝云天竹野鴉

周易

門庭風氣

任持子

大藝云諸山嶽奕

周易

身立山

久立子

權少翁正刻居日陰

周易

東京西園

四句院

權大講義福田行誠

周易

朝晝夜、昏明、寒暑、溫涼、清濁、冷熱。  
遠近、男女、老弱、長幼、吉凶、禍福、壽夭。  
消息、損益、善惡、多少、長短、大小、遲速。  
往來、安危、存亡、生死、雌雄、牝牡、前後。  
天陰陽、離合。

彼我、身隱顯、明滅、去留、是非、得失、寤寐、行止。  
寢卧、高低、貴賤、尊卑、首尾、親疎、淡濃、出入、  
内外、升降、喜怒、哀樂、左右、出入、動靜。  
燥濕、早晚、向背、用捨、張弛、豐歉。

詰默

厚薄、單複、難易、治亂、興廢、上下、衆寡、卷舒、斷續、進退、緩急、巧拙、功過、毀譽、貧富、疎密、賢愚、開閉周、勝負、甘苦、送迎、賣買、旦暮、呼吸、攻守、嫁娶、君臣、父子、祖孫、本末、陰陽、甥舅、婚姻、古今、叔姪、醉醒、向背、真偽、虛實、子奪。

天地時候、陰陽、早晚、險易、朝夕、晝夜、昏明、寒暑、溫涼、旦暮、豐歉、古今、清濁、冷熱、燥濕。

人事、君臣、父子、祖孫、叔姪、甥舅、婚姻、男女、老弱、禍福、貧富、往來、長幼、安危、哀樂、行止、壽夭、貴賤、宿寐、起卧、動靜、存亡、治亂、興廢、吉凶、親疎、善惡、喜怒、語默、出入、彼我。

通用

多少  
遲速  
隱顯  
難易  
緩急  
前後  
斷續  
開閉  
闊闊  
甘苦  
真偽  
虛實  
增減  
邪正

本末

長短  
内外  
明滅  
左右  
首尾  
表裏  
厚薄  
離合  
單複  
淡濃  
踈密  
大小  
上下  
遠近  
向背  
是非  
高低  
得失  
消息

賢愚  
功過  
醉醒  
問答  
嫁娶  
毀譽  
興奪  
衆寡  
呼吸  
用捨  
取  
攻守  
策弛  
勝負  
卷舒  
上下  
巧拙

動物  
雌雄  
牝牡

○序宿松等政友ト豆州、三庄アリ。今川氏至ノ臣。葛山監物友綱ヲ嗣ガル。友保氏尊ニ及テ  
信玄屬勝移亡テ。政友北條家ニ脚寄易木ト移ス。後勢秀康ニ仕フ。忠正  
ニ恨有テ。大野治房ノ隊ニ云處。大友吉光、源氏引  
○協國ちうぢ之元ド。榜後吸灰仁。経田攻卯也ト。移後時兩左之仰ト改メ。加原秀明  
ニ仕フ。園原ノ即ニ直三郎將クリ。輕率ヲ張出ス。因ニ送タリ。嘉明怒テ。汝一生將仰  
仕高ルフ。射失ト。彦直之悦ヒス。筆ヲ取テ。太床ニ江南野水遂不尚。高麗天地。南鴻  
ト玄鷗ヲ書。江陰。松山ヲ書ル。洪基阿波陣ニ夜討セ。將軍丸。傳。豈。松浦。嘉明カ  
詔アリ。云々。

大三河志(卷六十一)

○慶長十九年三月ノ條。七日初春前田利常ヨリ高山右近友祥少西毛驛守  
如安細川忠興ヨリ。加山隼人伴天連天主ノ邪法ノ徒尤以テ治陽ニ送  
ル。是日高山少西ヲ阿瑪港ニ放流セント。其後妻子眷属其餘一百  
餘人山口駿河守直友間宮権右衛門伊治長崎ヘ伴フ。残黨七十  
餘人奥州津輕外ノ濱ヘ放流ス。備年

日卷七 同年十月十三日

○長崎奉行長谷川藤廣。此春三月高山右近友祥入道南坊少西毛  
驛守如安及妻子長崎ノ獄ニ囚フ。キノ命アリテ入獄セシム。藤廣謀  
ヲ設ケ。鎮西三居ノ伴天連ヲ捕。同ノ禁獄ス。高山ヤ娘ハ加州ノ長臣  
松山城守長知妻也。高山乞テ長崎ヲ送リ。獄ミ入ル。彼即宗ノ死  
ヲ專ニ未來ノ宣福ヲ歎フ。故宗門ノ為ニ獄下ルラ。本臺トス。其徒長崎  
ニ捕ヘテ、ラ聞キ阿瑪港界百餘人ヲ。軍來迎エト。長崎ノ入津ス。藤  
廣高山少西茅百餘人ヲ。被松乗セ放流シ平戸ノ松浦肥前守隆信ノ

士卒ヲ以テ長崎及高来郡有馬近傍ノ耶穂宗ニ疑ひシキ民家ヲ廻シ  
画像かフ厚リ信仰スル者ヲ悉クリ捕へ獄ニ下シ其中ニ改宗スル者ヲ不仲  
門ニ及テメ隆信ヲ長崎ニ留メ堅ク守折セシムト告奉ル。編三  
七十四  
己卯年十一月二十四日  
長谷川左兵衛秀度間室權右衛門伊治長崎より來り高山西如安ヲ初メ耶穂宗  
ノ者ヲ一艘ニ乗セ南雲へ放流シ其室ヲ改メサル者有馬口津等四十餘人ヲ殺スト告奉ル。卷之四

尼崎

大三河志卷六  
慶長九年五月廿日  
編年

今家記二從

神祖二拜謁之麾下二拜攝州尼寺郡

北田越前守重利 今家記ニ從フ 祖祖ニ拜謁ニ麾下ノ子也 橋州尼崎ノ居  
代ニ命セラル元ト本願寺門跡執政下向内哉助重改入道法橋仲之丸  
子ニシテ按察使ト称ス松平輝政カ外甥タル以テ外家ノ氏ヲ冒ニ也田ト

松平武藏守利隆江戸城修築迄リ駿府ニ到リ拜謁ス神祖曰大坂ニ於テ近比浪士等ヲ集メ驕慢ノ形勢カラ聞ケリ構付尼崎ノ城ハ西園ト大坂ト連送シ因

嘆ナリ。旨シ一木收入攻取テ甚大事也。播州へ近リ遠ニ尼崎へ兵遣  
ハニ建部三十郎政長ヲ助ク。ニ政長幼年ナリ。汝ハ親族ナハ心ヲ深メ備  
ヲ力ス。キ旨シ命セテ利隆是夜駿府ヲ發シ。姫路ニ近ル。是ヨリ先建部  
内正頭光重太閤、時ヨリ尼崎ニ在城ス。光重死後政長幼少ニ委賴  
尼崎ヲ没収セント。政長池田輝政、親族名ヲ以テ輝政ヲ賴ミ神祖ヘ  
願ヒ前如ク尼崎ヲ領シ駿府江戸へ到リ。勅不封ヲ拜謝ス。因テ此命アリ。

秀頼尼崎ノ建御三十郎改長一代官所ノ米穀ラ城中ニ入ルキノ旨ヲ令ハ  
改長神裡ノ恩ニ依テ其命ニ従ハス尼崎ノ城ヲ守テ備ラナス池田利隆ハ  
去月尼崎援兵ノ命ヲ受テ居城姫路ニ收リ夫ヨリ備前岡山ヘ行キ老母  
ニ面謁ス姫路ヲ發スルキ長臣田宮對馬ヲ招キ尼崎、要害、地ナシ援軍  
衆兵ヲ遣スヘキ大内所公懲命アリ汝宮城筑後ト共ニ尼崎ノ自伐池田  
越前守重影相謀ニ尼崎ヲ守ルヘシト命シ弟左衛門督忠絶モ其旨ヲ告ム  
忠絶モ命ニ応シ南郊趙後二命シ名騎士ニ千人軽車百人ヲ副テ重影ヲ救

ハシム 建部家傳 武者奉行須賀在京ノ別寓、者ナリ是ヲ開テ尼崎、肝要

編年

ノ地ナリ誠ニ所謂大軍、中入ト云者ナリ恐々援軍ノ賓客サルヲト  
掌卷序ス文書南郊越後尼崎、行幸色長茅ニ命を行方往來ヲ送迎シメ  
ア大坂ヨリノ間諜ノ入ルヲ制ヌ宮城而後南郊越後石垣城下ヲ迎其ス  
タルニ大坂城中ヨリハ貢税、采穀ヲ運送ス、シト頻ニ催促ストモ豈長  
閏東ヲ憚リ命ニ後ラス因テ大坂ノ兵此城ヲ窺、庄市中邑村、人貨ヲ  
取リ警戒嚴キ故大坂ノ兵空ク歸ル改長重影是ヲ追伐シトス

日卷辛一十月廿九日  
乙危キ争戰ヲ敗ミシ城ヲ敵ニ取ラレバ不忠也ト是ヲ制止ス 編年

○尼崎近傍盜賊一揆起テ辭ナラス建部政長幼年故松平利隆松高カ  
伯父池田越前守重影ヲニ尼崎ヲ守シム因テ勝重使ヲ馳セ池田

重影カ守備怠ルヲ謹夷又是ニ於テ重影紀明ニ亥賊ノ長吹

族類皆誅戮ス、シ太郎大門罪ヲ謝シ帰テ鄉民ヲ制止ス因テ海道  
即チ千鎧ル招我枝田侍

片想且元ノ島大坂ノ無ニ宮ニタル尼崎早ノ故父神祇ノ也ニ達体大膳ラシテ陳也セ

日

卷七十六

元ノ此流ナリ

○尼崎城主建部平郎改長、秀賴ノ臣ド尼、御忍ニ屬シ播州池田加  
ノ援多子得テ守城セシム此地ニ大坂ノ倉廩アリテ貢税ヲ入羅、ノ東西  
和講成テ後深溝ノ松平主殿頃忠利公ヲ授キトソニ尼崎城ヲ守シム  
建部改長而西陣ニ到テ拜謁、尼崎ノ府寧ノ地ナリ少家ニテ彼地事  
大坂ノ通路ノ所ニ堅ク城ヲ構エルト皆ニ感シ仰々上嘗養シテ有

留二大坂城ニ三傳田兼相兵三百人ヲ率ヒテ伊崎ニ至ル使忍毛  
崎ニ倉原ノ貢税ヲ送ルヘシトニア松平忠利使名テ差白  
足下貢税ヲ取ヒト御崎ニテ來ラルト内ノ尼崎 松平主君歟忠  
利入奉シハニ速ヤルヘシ又兼相若ルヲ能安大坂城ニ收ル事忍忠  
利 称元経内ノ朱印 岩瀬  
日卷之八十 元和元二月廿七日  
○内藤紀伊守信江州長濱城ヲ守ケル松平主殿歟忠利三代テ攝  
州尼崎城ヲ守

東瀛詩選三十卷、南遊四卷

光緒九年癸未六月  
曲園先生

不唐虞翰林

卷一  
林忠  
伊藤准被  
石川四  
林春桂  
十三首

不多不欲多  
幸鼎服從右  
昔周陳昧誠  
亦是多也  
不事相敵也

諸大將始皆相勸之。東期一至，相與全軍而還。下士  
留宿，以為沾病，勿其苦。善相，使知氣力雄厚，已足使  
望而卻步。是年

卷二

本草綱目

十一

七

卷之三

卷二十一

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

三

卷三

先子

四十七年  
正月廿二

卷之三

卷之三

古文

四  
十  
首  
七

三

、石正誨

三十五首

田草

七首

富貴元和人

卷九

鳥色惟綠

百十七首

報公矣

四十首

其孝弟兼有師承蓋徑物從保太寧春毫門庭中來故發  
均不復前筆典型於有明文字中推而南秦為魁而至于此次之雲

卷六

死文雄

二十七首

柳葉內本門

高才子生平遇了第孝宗云云可以無可  
宗也勿其詩則頗有唐音不涉宋派

星雨那更

二十五首

既知已詩豪一時豪是屬故相因而要其歸則有明王士一派也

卷七

江村隱

三十二首

山居客

二十九首

五古三首

七律一首

七律二首

七律五首

七律十一首

紅娘御

元圃集

三十首

此不可謂亡目於心者矣為詩功著素淡厚後懷之微

覽唐宋諸大家集以著其於律之全流其詩以七律為最

卷八

白承祿

六十首

無再棄似錄之序於其詩甚致力焉當得李後主集亦大喜

于自墮了甲寅之服南歸作白然即詩院流芳亦稱李秀美  
三十首

賴惟亮

松柏果  
榆之器

卷之三

續集

卷五

山東海寧

此本一函  
卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

琴子希聲

元  
也  
文

卷之三

卷六  
丙午年夏月

卷之二

老れ  
ちゆり

卷之十

西山

卷之三

花  
山  
說

卷之二

之者也大都

庚午之二月

卷之五







山下利差

達納

那以吉之

差所夷

柳至立春

古志古延

湯井大

多西五之

本契末久

劉經的

金多英

中村有降

食地以

多惠东

吉原二

通卷三

花繁美母

正木出岁

神火免一

奥深間

布井経興

四不善之

情經湯

家國濶

古板頑

其酒若

亨卦屬

佑治母空

平多里

限

是至而歸  
即以方  
而南草設  
柳至立春  
古志古延  
山下利差  
本契末久  
中村有降  
食地以

河口逸口  
山下利差  
即日既  
始用因色  
山下利差  
奧聖事性  
桂山花承  
南景衡  
松風被口

花繁美母

伊東世英

花繁宏子

少杉致

山邊琳

情於乞之

妙聖陵

名御飯相

小林玉都

嶺白雋

喜御幸殖

萬井確

平多里

限

生方定  
攻堅福

於事印

言白印

中堅國資

省以證率

支原酒

小室赤穂

金澤漫歌

安本實

義重臺紀

信之連

長川佐

近松

少林庵

飯田屋

至石穀

山室元吉

風雨連

重宗和貞

石田佐

重宗祐祐

田中吉

時任義

能村宣

柳家萬款  
高車信義  
岸本定義  
西元  
名和孝和  
兵派信生  
山澤長助  
土井光  
高信元  
捕下覺

柳家長秋  
少山耕  
萬代庵

柳田連

少山耕

萬代庵

以助賀

至石穀

萬代庵

至石穀

萬代庵

高田亮

柳家萬

高田亮

柳家萬

萬葉歌

西山空角

里村慕

有馬觀

山角後

重步沈志

和田良

吉高義元

吉高義元

市川孰

而井章

綿山彌

井上廣成

劉昇

竹内鶴

萬葉歌

西山空角

里村慕

有馬觀

山角後

重步沈志

和田良

吉高義元

吉高義元

市川孰

而井章

綿山彌

井上廣成

劉昇

竹内鶴

佐藤松村

喜井佐佐

山中辰敬

喜井佐佐

山中辰敬

少阿歌房

日野新

佐田政義

七年歌

神室寅

児之水本

相馬善

湯川元文

河國後

赤松山

山嶽御風  
山中辰敬  
喜井佐佐

佐山信  
稻荷信成  
至日敬

望蘇濟  
四墨山一毛  
山中辰敬  
喜井佐佐

伊東以寬  
土井光

志而平卫

游邑

松名托其

立怪性也

廢而祀年

山田而立

自皇祖氏

少海流

因及于業

以如之矣矣

日御政事

四十是年

預復

洋益其

至多其詳

布角既元

以聖羅

地內車附

預稿

三事曰開

土以東

至山以

天岸宜

龜岩川

向山崇

南摩羅江

江馬豐波

那斯通云

度狀記

大光文

度狀記

成金宏

大光文

度狀記

例言

一詩為道玉大孝者為因其性所生全於東廟詩序言此石聲家而此石聲千秋之詩止就全性於一作而有之謂此為玉廟之詩一

擇言石雖史家之化況詩家全其美而詩所選者不雅善詩集不

有通篇用二字歌者有以二字或三字者皆先大古亦教其臣制覆  
一撕古之傳大亦所首重國之人多寡之至孝詩之先尊尊敬各家各  
後乃能自成一派也劉子之謂是也蓋以壯觀照全則智此言人  
之言而允自言其言也詩之性情儼不至此故其詩之流入後者十三二五  
一東國之詩於方律多有未諳熟一三五不諳之說遂有七言律詩而  
句末三字皆用重聲者執通歌者執通歌者執通歌者執通歌者執通歌者  
施之律詩殊欠詩美之比之數不得不經芟艸誰間或以佳句可度未  
忍棄遂輒私易其一二字以期協律代斬傷手所弗取矣

一古詩以氣語為主多集句之言古詩固矣不勝枚舉或以曼衍敗其律  
有枝葉亂散之譏或以模擬損其真有優孟衣冠之謂雖評論之亦極節  
嘗竟而不多有圖然評語此古書所無之中土自前明以來時文盛行乃有圖  
點評既刻古書者從而效之者漸者所笑此既極刻削除余不著一語惟  
每人文下注明字号里居而全因古就更人附滅敷衍或論其孝術深沉  
或若其生屬大節為泊詩者知人論世之助又或淡入選而佳句可使者亦  
附錄之證明有美必揚之以一覽而見全豹之文嘗齋而識全豹  
旨正之云心自謂委質矣

二

一建國之書每行之旁多有譯音惟徂徠之書每行朝鮮人成就潤謂  
此一端可知茂御尚友家傳之士事見其國人原公著所著花譜叢  
該此遂刻於中土更無後言方注譯音取法徂徠尤取強秀其國傳

一和中華例志啟而之字王東國原年舊而立其次選自都人刻於土  
則立而之字必志改易即立東國之人立而之字志不切之而立於  
都者入門向誦之矣

一詔京之集經例多殊之者依丈集

一詔京人年代先後未以考詳但以布文所書年序約其次前後舛錯互  
有所不免矣

一東國之集止題其事先生集或某引某言稿稿之次久雖彼都人士有不

能卒其名者余甚懶焉至化庚人詩不有以集氏傳者卒稿稿  
差闊之例以待後補

一東國之集有涉譯事者如鳥火作鳩鳩又作鳩猶於形於無譯也至加  
種字根字近字當字求之字書皆無可考而復於諸集中清題者  
卒皆人名地名不可更易悉以其名亦名之以之爲之號也如詩集中文  
義以次人之歌曰破應人之求曰響至其後久相沿以此不必盡以  
中法範之

物雙松

徂徠深於性學。蓋東國人之講宋學，既於氣不惺焉而林逋山房之東國人之講漢學，始於性不惺焉而林逋山房之是因彼中傷林一巨擘也。余嘗見其所著論，浩微一書，詳諭通達，多可考者。所謂「編輯」，於秦室下，得成於原思及子，舊書名，重出。體見亦微，會意云以矣。余已取物中，則入春生堂，隨筆定全集中論。李向、陶經義，好与宋儒牴牾，然其所是，往往卓然可存。蓋其所學有餘於詩之外者，宜其詩之超越等倫也。東國之詩，至徂徠而一变，蓋徂徠提倡古孝而服南郭又後而張之。於是家有《滄浪》之集，人稱「歸帆」，書翰唱吟，高洋之序盈耳矣。

涇君美

白石出木下吹庵，門沿開弓徵，通曉傳漢古今典，而其吟芳，書凡一石，千餘種。時人称其有用而余皆未之見。所見者止其詩一卷耳。江都北海，称其喉確，皆殊響。語皆頤，今謬其詩，亦可是一斑也。

灝長惺

鶯是云游於服南郭之門，南郭見其文，駕黑之不居之才子之門。其後忽聞陽五華黑耳。

服

薛子遷為物，居茂卿而弃而其全集中論，李之作，殊勘似於經。李微不足至，然其詩則頗有出藍之歎。五七言古詩，氣類高古，且有詞藻而七律尤

安藤燒園

東野之學於徂徠之門，甚為得且，指其則惜。二十七而卒，不知所終。

富允

字日休。長門知孝，序云：相江子一章，遊富宜之表人，每識其姓名者。

言其人固肥，遜之士邪。書後，有奉徂徠先生及寄服子遷者，是其人固

子遷曰：「治物乃萬物之門。」其詩，亦至。子遷伯仲也。

伊藤長允

仁荷始倡孟子而東屋宿达之所著有：「……」。其書，盖亦其時一鉅。

傳也。詩乃其子善詔，所漏自謂不忍，遂隻字以假瑜。確是聖子人之詩，有未

可以清律，便之者，懷擇加干首。其佳處，略無二三。

石云淵

仲諭，嘗及服南郭之門，南郭為製序，稱其才學，兼備則其弟所造可知也。惜其中年，以謝故，事成家業，後聞人舟云昇，為刻其詩文，存其墓。

中行子輯也。文士名心，亦可哀矣。

名號苦

高野惟松

東野受業於物，徂徠生十七歲而失明，遂廢百事，惟詩是務。自物氏，偶為古文，辟門下，恆一時之盛，而推翹楚者，則惟服南郭。高野之子，云東野，論高，猶大名云。其字高，以此。今流芳七律，信為有明。七子一派，足不復。豈子郎，謂此。詞藻高，猶風骨。嚴重，固亦一時之傑作也。

七律中，未遑佳句。如陽春白雪，昌黎三年，獨創豪春，初就五言，極盡日月，俱快。大海沉，歲晚蘋蕪，並青草以天定。滄海白石仰，玉魚長在。九疑海石馬，千秋蘿翠。翠微，就水冷芙蓉，石井，秋晴尚翠。均三首，獨創豪春，初就五言，極盡日月，俱快。五言，浮雲，雲在。而物，物在。猶帆船也。大底還孤芳，魚歸潭，墨人毛源注前錄，風之。

物高直月仙潭水至出芙蓉  
萬堆林木旭日照三茅山  
海嶺雲流厚渺長  
天布云雨潤海久晴双白雲  
向君怀抱出草句置之深區  
集中不無奇精葉

仲英君

仲英亦姓申西氏因游於服南部之門南郊大夫工以亡有妻女仲英贊焉遂性  
送其服氏為南郊義子云則女也其父申西集为人所捕陷竄化臨死謂仲英曰吾家不無自  
雪兒為我雪之使鬼得吸父母申英廟玉江戶當於官事裏得白是其人亦有心人  
止生平少所之欲自生核極成一家家曰尚有得於我家凡不必守然今後其詩亦仍

是南郊一派耳

源真貿

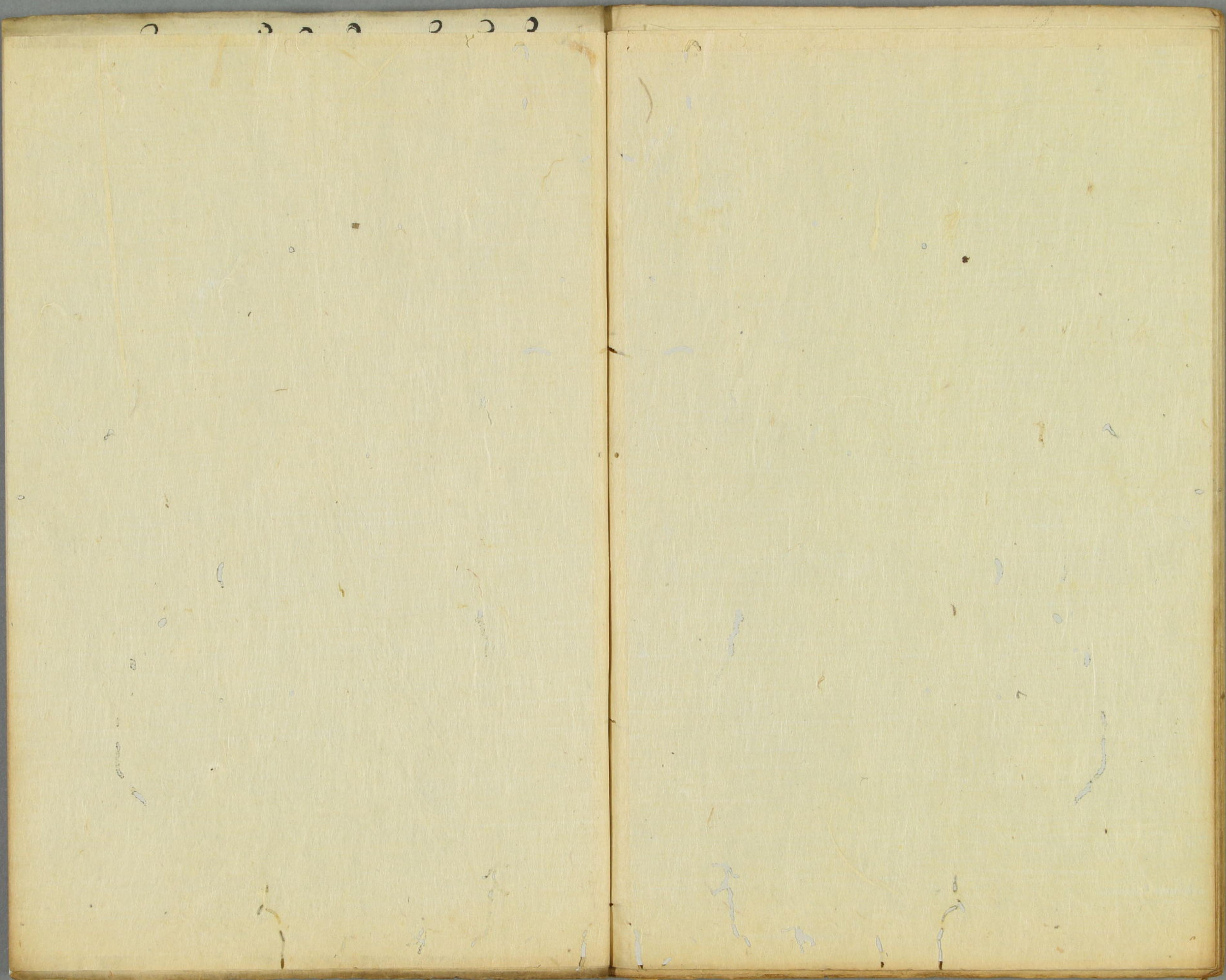
瀘州受業於服士遠固物徂徠再傳弟子也其詩渾厚典雅雖是老成尚有興

刑望而知万物氏門徑中人

太田元貞

錦城以經術文章馳名於時詩尤所長此卷乃其門人所刊七律一百首然後頗有  
載金雕玉印充其求工者

東園自物徂徠提倡古學一時言詩卷以滄溟為宗高華典重乍疏之亦殊一美若以其  
常也屢屢累牘無光天地江湖浮雲白日入市沽不取厭於人錦城有元伯恆力抗王孝之体錦城  
遂與其友山中憲之鎔化唐宋別一家流暢淵藪竟塵寰天上飯廻別惜伯恆之空乏  
詩均不得其飾誠又研精佐序不虛以詩侍酒石者蓋寥寥多怨其詩冥有形色凡其  
之功自生之後在園之詩又一變矣



禮記

○狎其則簡莊其則不親足故君子之狎足以文其歛莊足以成禮而已

○山渟如璞玉渾全人皆欽其寶莫知若其器

○天下有至貴而非勢位也有至富而非金玉也有至壽而非千載也

○反性則貴矣適情知足則富矣明死生之分則壽矣

○當其欣於所遇暫得於已快然自足不知老之將至

○羲之蘭亭序

○製芰荷以為衣兮集芙蓉以為裳不吾知其亦已兮

○惟興繼服難勝

○且夫直前太銳近於用枉取必太過近於復恒在易固有戒矣惟錢也能

○通天下之志惟深也無成天下之務自古欲以成務而或憤焉者未必尽是

○庸人或豪傑有責焉耳

○明唐順之楊繼盛書是類要警戒部

○天道恢々豈不大哉談言微中亦可以解紓

○史涓夢得太史公

つ 脇脇

ハ犬侍竹編セイシキセイシカウ  
裁着スルツクノ括縫ハナフサテオ一一ニ跨ハギサシ做スル先

口 口 黒蛇皮緑クモヘビ袖アマツラ一一ノ衣キヌ二ハカリ

墨丸ニ足モ脇脇ハタハタ前フクヨカトモ此ミムクト  
イ云フ彼疵瘻ヒヅラ文字ヨリ出シテ高低アルヲ云々カ

卷五  
三十  
活人  
卷八  
六三

永富鳳字朝陽號楓喟著吐方集漫遊雜記